

読書ノート

日本経済新聞社 編

『働くということ』

浅川 正健

(伊藤忠商事株式会社 人事部 キャリアカウンセリング室長)

日本経済新聞に連載当時、仕事仲間と愛読していた。昨秋出版されるとすぐに買い求め、家でも話題にした。多くの実名の登場人物、その働きぶりや心情、そして様々な問題が浮き彫りにされている。勤務先でキャリアカウンセリングを業とする私の目に、数々の言葉が鋭く突き刺さってきた。相談に来る社員やその上司との対話に時間を忘れる自分の毎日と重なって、心に重く残る頁も多々あった。いくつかの章から振り返ってみよう。

第一章「二つの価値に揺れる」。カウンセリングでは、人間や仕事の価値は一律ではないと相手に気付けさせることが重要だ。明確な価値観を持って仕事に打ち込む人は年代を問わず、自分も他人も同じように大切にできる。自らの軸を見失った時の心の痛みが、この章の一人一人の言葉から滲み出ている。玄田先生の「年一回は自分が何のために働いてきたのか考えるべき」との見方に共鳴する。職業生活を通じて一度も考えない人が多いというのが実態ゆえである。転職の準備に追い込まれてからではなく、「余裕の有る間にキャリアカウンセリングを体験してもらおう」ことを企業の常識としたい。生活のためでも仕事が好きだからでも社会に貢献したいからでも、働く目的を自覚した人はいい顔をしている。組織の中での出世には関係なく、その目は輝き、話しても気持ちが良い。彼らが「昨日、高校生の息子と久しぶりにゆっくり話をしました。有難う」などと話してくれたときはカウンセラーとしての冥利に尽きる。わが子との接し方も変わり、次の世代への好ましい影響が出たと思えるときである。

第二章「不安と向き合う」。「身動きできない商社



●日本経済新聞社

2004年9月刊

B6判・291頁・1575円

(税込)

マン」と恐ろしい見出しに目を見張った。どんな企業でも、若手は悩みを持っているものだ。入社前後に働くことの意義や自らを「見つめる」機会が少ないのが原因ではないかと思う。親も教師も上司も経営者も、「しつけ」「教育」「仕事を通じての研修(OJT)」「人材育成」を口にしていてもスローガン・建前だけで、真剣に本音をぶつけ合う機会が極端に減ったのが問題だと感じる。

第四章の「会社との距離を探る」。「最近の企業は社員を何だと思っているのか」と痛烈な言葉から始まる。ここに描かれたような、真剣勝負で上司にぶつかる産業医の姿がどの企業でも見られるようになれば素晴らしい。ただ医師やEAP(従業員支援制度)に依存する前に、管理者の意識改革やしっかりしたキャリアカウンセリングの体制の整備によって社員のフォローができればもっと理想的だと思う。「働き甲斐を高め合う関係作り」という表現を見て、日頃考えている問題を再認識した。

本書の取材に取り組みされた記者、登場した方々の思いを風化させてほしくないと思う。景気が少し好転し、企業業績が向上くとすぐに「個」は後回しにし、「キャリア」など難しいことは二の次だ、とする向きが増えてくる。次には少子化の必然的な結果として人手不足が取りざたされ、外国人労働者の労務問題が再燃し、しばらくくするとまた中高年の安易な肩たたきがはびこる。こんな繰り返しでは、企

業と社員が運命共同体だとは永久に言えまい。「働くということ」がもっと楽しい、前向きな気持ちで考えられる時代を期待したい。それには日頃の親、教師、上司とのちょっとした語り合いが大切なのだと確信した。

本書は「働くということ」についての理論を並べてあるのではない。こうなさい、という指示でもない。人には様々な考え方があり、生き方がある。

こんな人もいる、と語りかけ、各章の最後には、有識者の「この人に聞く」で整理されている。「人生」が凝縮した「仕事」について伝えたいという真摯な思いが詰まった一冊と言えよう。「学ぶということ」「遊ぶということ」「健康ということ」「旅するということ」、さまざまな視点から悩みの多い人たちに、古くからの考え方を問いかけ、新しい考えを投げかける。こうした試みはぜひ続けてほしい。